



昭和 27 年 5 月 23 日 高野山俳句大会に参加し、金剛峯寺別殿の廊下で虚子と談笑する汀子（21歳）。



自筆の句軸や短冊の他に、とりわけ笑顔の素敵な写真を陳列して、その足跡を辿ります。汀子は昭和六年、高浜虚子の長男・年尾の次女として生まれ、小学生の頃から俳句に親しみ、二十代の頃は虚子や年尾の吟行に同伴して句会に参加し、結婚後も子育てと並行して「ホトトギス」や「玉藻」に投句しました。しかし昭和五十二年七月、年尾が突然脳血栓で倒れ、若十四十六歳にして「ホトトギス」主宰代行という重責を背負い、以後三年間は父と夫の介護と死別という怒濤の日々を送りました。その様などん底の時でも、喪失感から折れそうになる心を癒し、生き抜く勇気を与えてくれたのが、「俳句を作る事」だったのです。

以後汀子は、季題を大切にする有季定型のホトトギス俳句の普及に邁進し、学生をはじめとする多くの句会を指導。すばらしい句に出会うことを至福の喜びとして、朝日新聞俳壇選者を四十年以上続けました。晴れ女を自認し、いつも前向きだった汀子館長から、心豊かに生きるヒントを見つけていただければ幸甚です。

昭和 40 年頃の稻畑家 右より頼子（33 年生まれ）、廣太郎（32 年生まれ）、深二郎（37 年生まれ）。教会を通じて知り合った順三と汀子は、汀子の誕生日が一日だけ早い、同級生夫婦だった。汀子が「ホトトギス」主宰を継承出来たのも、順三の応援あってのことである。



虚子記念文学館 稲畑汀子回顧展

令和四年四月一日～令和五年三月十一日

2022年5月
第41号



昭和 62 年 8 月 15 日 虚子・年尾・汀子の句を染め抜いた、田中竜児氏デザインの揃いの浴衣でホトトギス連を組み、阿波踊に参加。汀子は昭和 54 年以降、計 7 回も参加しており、中でも 62 年のホトトギス連は、80 人を超す大所帯だった。



昭和 59 年 芦屋の自宅書斎での汀子（53 歳）。部屋の模様替えが大好きだった汀子は、書斎の壁全面を天井までの本棚に作り替え、背には図書館さながらの辞書類が並ぶ。選句をすることは日々学ぶことである、とこの本棚が語っていよう。（撮影 藤森武氏）



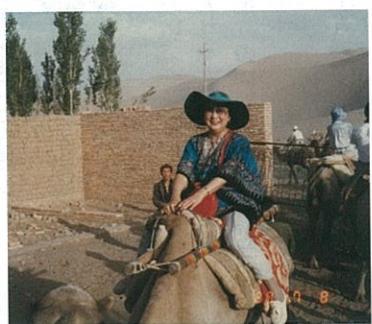
昭和 59 年 「送るわよ。お乗りなさい。」そんな声が聞こえてきそうな 1 枚。幼稚園に通う子供の送迎に車が必要となり、運転免許を取得。車好きの夫に鍛えられ、最初に中古の外車で練習し、ボンネットを開けての修理やタイヤ交換まで気丈にこなせるまでに上達したという。運転が気分転換と語った汀子は、松山や信州へも必ず車で移動した。（撮影 藤森武氏）



令和元年、東京の自宅マンションにて著書『俳句を愛するならば』の取材を受ける汀子（88 歳）。（撮影 藤田浩司氏）



平成 4 年 4 月、千代田区丸之内ビルのホトトギス社にて、大好きな紺色と白のコーディネイトで撮影（61 歳）。



昭和 63 年 7 月 8 日 68 人の敦煌大吟行となった 2 度目のシルクロードの旅で、鳴沙山にてラクダに乗り御満悦な汀子。莫高窟に見る歴史の重みと自然の厳しさを再確認した旅となつた。「夏帽子飛ばし砂塵を捲き上ぐる」



稻畑汀子回顧展

らは、左のような葉書（昭和二十四年九月三十日付）が送られています。
汀子宛虚子葉書
元気になつたさうで安心致しました。なほよく氣をおつけなさい。
油断大敵。今度は寄る時間が無さうです。絵は写生のこと。お手本。

独特なりズムに特徴があり、柳絮の句等には、後の「摘まずおく松虫草は野の花よ」に見られるような、自然への敬愛が感じられます。

「夏の月美しきものそれは心」

昭和二十七年の詠。

高浜汀子は昭和六年一月八日、虚子の長男・年尾と

喜美（俳号「きみ子」）の次女として、横浜本牧に生まれました。女兒誕生の知らせを受けた祖父虚子は、手紙で「行子、典子、克子、汀子、順子」を提案し、年尾がその中から「汀子」を選んでいます。

そして汀子四歳の時、年尾の転勤で一家は兵庫県芦屋徳塚町に転居。年尾の妹・星野立子の義理の母に縁のある、宝塚の小林聖心女子学院小学部に姉の中子と入学し、この頃より俳句に親しみました。昭和十八年には芦屋月若町の新居に移るも、二十年八月六日の空襲で自宅が全焼し、汀子と妹・朋子、弟・初也の三人は、一時和田山の俳人・古屋敷香律居に疎開。戦後、汀子のみ小林聖心女子学院寄宿舎に入り、十五歳で力トリックに入信します。

汀子は寄宿舎から虚子へ宛て、近況と共に俳句を書き付けていました。昭和二十二年七月の汀子宛虚子葉書には、「あなたの句、三句とも、もう一息といふところ。精出して勉強なさい」と、虚子からのエールが記されています。そして翌月の「ホトトギス」（二十二年八月号）には、「武者人形飾れる床の大きさよ（汀子句集）では「飾りし」と訂正）が初入選。汀子のホトトギスデビューは、なんと十六歳でした。

女学校最後の昭和二十四年三月、卒業劇「サウロ（ヘ

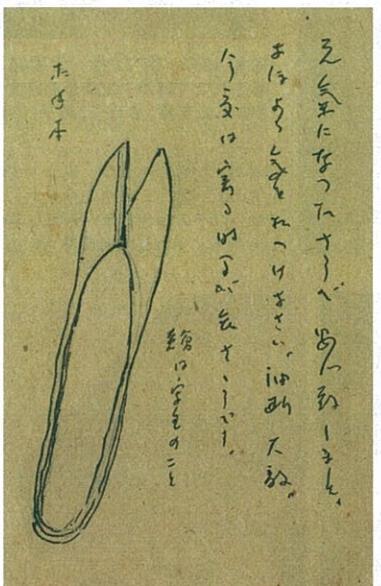
ブライ語で聖パウロ）」で、汀子は青年コルネリオを演じています。この戯曲は、当時まだ全く無名だった遠藤周作の書き下ろしで、周作の母親が小林聖心で音楽教師をしていたことから実現したのでした。

しかしこの頃の汀子は体調がすぐれず、内科医だった俳人の田上鯨波に肺湿潤と診察され、寄宿舎内の病室で約一年間の療養生活を余儀なくされました。幸い薬が効いて間もなく治癒するものの、心配性の虚子か

汀子の句は、二十代の汀子の句は、



昭和27年7月25日～8月2日 山中湖山荘前にて撮影。
前列右より酒井小鳩、汀子（21歳）、中村波奈子。後列右から新田公子、京極杞陽、虚子、田中憲二郎、翁長恭子。



翌二十五年四月からは大学が出来て英語専攻科に進みますが、一年遅れたためクラスメートと同じ授業が受けられず、結局学校をやめ、本格的に俳句を学ぶこととなりました。

汀子の代表句として最も人口に膾炙した「今日何も彼にもかも春らしく」は、昭和二十六年春、虚子選朝日俳壇入選句です。俳人汀子は、この句からスタートしました。

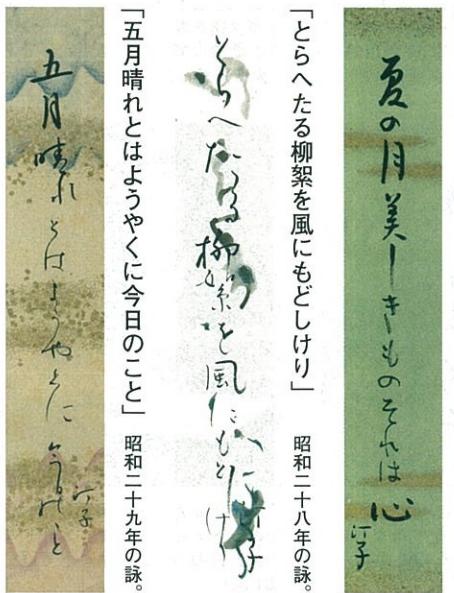
昭和二十七年からは、虚子や年尾に同行して北海道や九州を吟行し、山中湖の虚子山荘での若手稽古会に加わっています。

汀子は若い頃より、すばりと物事を捉え、あるがままを受け入れる大らかさと、優しく思いやりに溢れた、繊細な心配りの両面を持ち合わせていました。俳句もまた然りです。

『二十五歳で結婚し、三人の子の母に』



「ホトトギス」の挿絵を担当していた淡路島の画家、直原玉青によるお目出度い「十二支図」に、汀子が揮



「五月晴れとはようやくに今日のこと」

昭和二十九年の詠。



「夏の月美しきものそれは心」

昭和二十七年の詠。

毫した句は「幸せの待ち居る如く初暦」。この句は昭和三十一年新春詠で、この年の五月二十三日、汀子は教会を通じて知り合った稻畠順三と夙川カトリック教会で結婚しました。

京大ラグビー部で活躍した順三は、ゴルフや車、ワイン、カメラ、クラシック音楽や映画の鑑賞、観葉植物の温室栽培等と非常に多趣味で、汀子も順三の影響を受け、六甲山でゴルフを愉しむこともありました。二男一女に恵まれ、カメラ好きな順三は、汀子と子供達を写真のみならず、8ミリフィルムにも収めています。

汀子は結婚後も虚子に俳句をみてもらっていましたが、子育ての忙しさから吟行にも行けず、俳句が出来ずに悩んでいました。そんな時「身近な季題で作りなさい」という虚子の助言を得て、昭和三十年後半から四十年代にかけては、子供を中心とする微笑ましい句が散見します。

「紫陽花の色にはじまる子の日誌」

昭和三十九年の詠。廣太郎七歳。

「長男と競ひ泳ぎて負けまじく」
昭和四十二年の詠。廣太郎十歳、汀子三十六歳。因みに汀子は「あぶり横泳ぎ」で、顔のみ上を向き、飛沫を立てない優雅な泳法だとか。

「長男と競ひ泳ぎて負けまじく」
昭和四十二年の詠。廣太郎十歳、汀子三十六歳。因みに汀子は「あぶり横泳ぎ」で、顔のみ上を向き、飛沫を立てない優雅な泳法だとか。



「さそり座を憶えし吾子に星流れ」

昭和四十七年の詠で、深二郎十歳。

さそり
座を

憶え
吾子に

日生
流す

丁子

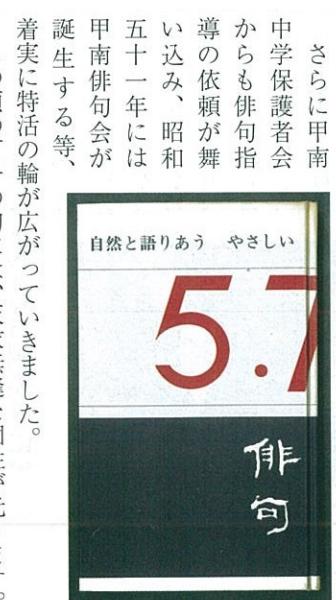
『俳句を「作る」から「指導する」立場へ』

昭和四十九年は、汀子にとつて大きな転機となりました。汀子はこの頃より、多忙な父年尾に代わり、地方のホトトギス大会等の指導に出向いています。



昭和49年10月、高知ホトトギス大会を指導する汀子（43歳）。

また、廣太郎や深二郎が通っていた甲南中学からの要請で、特別教育活動（特活）として、毎週学生達に俳句を教えることになりました。四年後にはこの特活での経験を活かし、俳句入門書『自然と語りあうやさしい俳句』を出版。装丁や題簽は、同じ甲南の先生方が協力してくれました。



昭和49年4月に始まった特活は、時には教員達もお伴して芭蕉ゆかりの地や比叡山等でも吟行句会を行い、20年以上続いた。写真は平成5年2月、最後の授業風景。

「コスモスの色の分れ目通れさう」

昭和四十九年の詠。

「秋草の野にある心活けられし」
昭和五十年九月の詠。

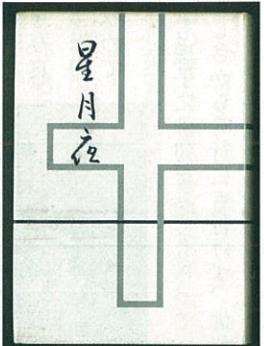
「秋草の野にある心活けられし」
昭和五十年九月の詠。

《幾多の試練を超えて》

昭和五十二年七月には父年尾が脳血栓で倒れ、汀子は若干四十六歳にして、俳誌「ホトトギス」主宰代行という重責を負うこととなります。

さらに二年後の五十四年九月、夫・順三が原因不明の病で急遽入院し、翌十月には年尾が逝去。連日病院に寝泊まりして献身的な介護を続ける傍ら、年尾の悲願であった「ホトトギス」壱千号を無事発行しました。その喜びも束の間、最愛の夫が四十九歳の若さで旅立つてしまします。汀子の試練は続きました。

長き夜の苦一ナミタクシキ合ひ一や



昭和 56 年 9 月 9 日、順三 1 周忌に出版した句文集。田中竜児氏による装丁がモダンである。

句会を通して自他共に学びたいと考えていた汀子は、若い俳人の育成にも尽力しています。奇しくも年尾が亡くなった昭和五十四年十月二十六日、戦後生まれの若手俳人達が集まつて汀子に指導を乞うたことから、若手俳人による「野分会」が発足。野分にも倒れぬ強い草木同様に、若い俳人達のたくましい成長を願い、汀子が命名しました。野分会は月例句会の他に「夏行」と称する稽古会も行い、会員と汀子との質疑応答は「ホトトギス」に掲載され、『俳句? それはね?』汀子は語る「一句百言』にまとめられています。

《まだ見ぬ吟行地を求めて》

昭和五十八年の上海・杭州・蘇州の旅を皮切りに、シルクロード、ドイツ、イギリス、トルコ、フィリピン、韓国と、冒險心溢れる汀子は、異国の地での吟行にも意欲的でした。中でも『自然と語りあうやさしい俳句』が甲南学園の元学長・鈴木正治氏によつて翻訳され、ミュンヘン独日協会会长のクリンゲ氏の仲介によりド

順三が亡くなった翌年の五十六年一月十七日、日本一鶴が飛来すると言われる鹿児島県出水を吟行した折、夜明けに一羽、又一羽と舞翔ける鶴の姿を目撃し、自身の心の呪縛が少しづつ解き放たれ、まるで自分が鶴の翼に乗つて、どこまでも空を舞つているような思いに駆られたといいます。

《鶴の飛翔に心の自由を得て》

詠。汀子はこの句を「神への存問(挨拶)」と語り、この苦闘の三年間を、一周忌に出版した句文集『星月夜』に凝縮させていきます。

汀子はこの句を得て、「俳句こそ、人の心を癒し、再び生き抜く力を与えるものである」と確信したのでした。

《若い俳人達を育てる》

イツを訪問しています。写真は三回目の交流の旅で会場となつたバート・ホンブルク城中庭で、平成二年十月六日に撮影されたものです。

《日本伝統俳句協会を設立》

虚子が唱えた「俳句は有季定型の花鳥諷詠詩である」という俳句理念をより深め、現代に相応しい作品を創造するホトトギス俳人育成のため、汀子は昭和六十二年四月に日本伝統俳句協会を設立し、会長に就任しました。機関誌「花鳥諷詠」にて活動を紹介しています。

《テレビでもお馴染みに》

平成四年から、二十年近く続いた「俳句王国」に始まり、平成六年からは「NHK俳壇」、平成十七年からは「NHK俳句」と、六、七十年代の汀子は、精力的にテレビやラジオに出演しています。中でも「朝日俳壇選者の集い」の公開録画放送では、無季自由律俳句を容認する金子兜太氏との丁々発止と火花を散らす論戦が、番組の名物となりました。



平成 8 年「俳句王国」のゲストは、作家・評論家で句歴も長い塩田丸男氏。

《ボランティア活動、教育活動にも参加》

日々多忙ではありましたが、汀子は芦屋市教育委員会を平成四年から十二年間務め、平成五年からは地球ボランティア協会の会長に就任して、フィリピン援助を二十年以上続けています。こういったボランティア精神は、カトリック精神に通じるところが大きく、平成二十二年二月には、フィリピンアロヨ大統領より感謝状を授与されました。

它といふ自由鶴舞ひやすらぎは
汀子





平成 8 年 4 月 20 日 吉野山くつろぎの旅にて



平成 22 年 2 月 15 日 20 年間に亘るフィリピンへのボランティア活動に対し、アロヨ大統領より感謝状を贈られる汀子。

吉野桜ばかりを集めた句集『花』には、「花の旅吉野の狐嫁入す」といったユニークな句も人集しています。

また汀子は常々島根三瓶山を「句材の宝庫」と称してこよなく愛し、生涯に吟行すること四十回余。昭和五十九月には「摘まずおく松虫草は野の花よ」の秀吟を得、昭和六十三年七月に句碑が建立されています。

『とりわけ愛した吉野山と三瓶山』
昭和六十一年四月十五日、吟行で訪れた満開の吉野山で、桜の花びらが風に乗って谷底へと流れ込んでいく風景を、汀子は「一山の花の散り込む谷と聞く」と詠んでいます。この日吉野山に魅了された汀子は、以後「吉野山くつろぎの旅」と称して毎年吉野山を訪れ、くつろぎの旅は平成三十一年まで続きました。平成二十一年には吉野山の定宿にこの句の句碑が建立されています。



「摘まずおく松虫草は野の花よ」句碑に併む汀子と廣太郎。

そもそも汀子にとって松虫草は、特に親しい野の花でした。結婚して間もない頃、夫順三と六甲山でゴルフ中にボールを追つて叢に分け入り、そこで見つけた楚々と咲く松虫草の記憶は生涯忘れられない、と語っています。

卒寿を迎えた令和三年七月十八日にも島根に出向き、この思い出深い三瓶山が最後の吟行地となりました。

嬉しい時も悲しい時も、日々俳句を作り、自然を見つめ、自分を見つめ直す。俳句を作る愉しさを人に教え、また自らも人一倍楽しむ。汀子は平明にして余韻ある「俳句一すじ」の人生を見事に貫き通しました。

第六十回六甲会 (令和三年四月二日) 稲畑 廣太郎 選

兼題「風船・若芝」その他当季雑詠 第一句会入選句

学舎の楽の流るる春の芝

○若芝を喜ぶあんよ見る心

○若芝のこれからといふ雨やさし

○風船を放してひとつひとつ

○風船の七色空を塞ぎけり

○風船が目印となりペーイー

○風船に山河てふ空りにけり

○風船を赤いバージンロードかな

○風船に歩活量を試さる

○風船に連れ歩かれて遊ばれて

○風船に魔法の息を吹き込んで

○風船が針金で浮く日もありし

○若芝や聖書のやうな句集読む

○指離れ風船尻尾ふりながら

○ふくれきて妻と風船大破裂

○ぐづり出す手に風船を持たせけり

○風船を自在に大の出来上がる

○若芝や転げ回つて寝転んで

○風船の曳く乳母車風が押す

○若芝や屋台ふうせん玉並べ

○途中下車三代句碑に花の風

○若芝や葉流

○山本千賀子

○黒田千賀子

○石川治子

○河辺さち子

○奥田好子

○大西真穂

○山本好子

○奥田好子

○山本好子

○石川多歌司

○河辺さち子

○奥田好子

○山本好子

○小川孝子

○山本好子

○冬座敷足裏に固き達かな
語らざるセビアの写真冬座敷

山越えの北風遊ぶ芦屋浜
北風と戦ふ杉の秀のありぬ

北風やネッカチーフで目だけ出し

詰輪祝ぎ館のいやさか冬日漫し

北風の鳴る闇の調べは海へ吐く

汀子選休載と紙に霜の朝

冬座敷文机一つ影一つ

北風やつんづん尖り出す水辺

閉めきつて秘密の話冬座敷

日溜りに包まれて居る冬座敷

安眠を崩すかに鳴る夜半の北風

旧家守の不便な暮し冬座敷

北風のまにまに星の瞬きぬ

北風や海神の笛鳴りひびく

ひとりみの黙の張りで冬座敷

床の間に香の広がる冬座敷

玻璃越しの日差し長々冬座敷

天帝の大袋より出たる北風

北風の攢つて行きしづが誇り

丹田に自づと冬座敷

きつちりと閉めてください冬座敷

一幅の書の語りくる冬座敷

冬座敷肩肘張つてする話

北風が風の口笛掬ひたる

静けさに耳そばだてる冬座敷

北風にに耳そばだてる冬座敷

中々に出番無さかに冬座敷

冬座敷古武士の孤高めく静寂

駅までは北風に真向ふは無く

冬座敷數くらりと揺らす今朝の地震

庭明り鳥も影絵に冬座敷

座布団の丸も四角も冬座敷

(廣太郎先生出句)

寒灯に映ゆほととぎす創刊号

父の座の遺されしまる冬座敷

寒風裡苦屋川水満々と

北風荒ぶ富嶽は地震に明け初むる

虚子の軸掛け冬座敷出来上る

暮早きことに顔ぶれ少なかり

北風もはんなりと吹く先斗町

北風の木端微塵に碎く愛

○テレビには綾子のかべー冬座敷

○冬座敷足裏に固き達かな

語らざるセビアの写真冬座敷

山越えの北風遊ぶ芦屋浜

北風と戦ふ杉の秀のありぬ

北風やネッカチーフで目だけ出し

詰輪祝ぎ館のいやさか冬日漫し

北風の鳴る闇の調べは海へ吐く

汀子選休載と紙に霜の朝

冬座敷文机一つ影一つ

北風やつんづん尖り出す水辺

閉めきつて秘密の話冬座敷

日溜りに包まれて居る冬座敷

安眠を崩すかに鳴る夜半の北風

旧家守の不便な暮し冬座敷

北風のまにまに星の瞬きぬ

北風や海神の笛鳴りひびく

ひとりみの黙の張りで冬座敷

床の間に香の広がる冬座敷

玻璃越しの日差し長々冬座敷

天帝の大袋より出たる北風

北風の攢つて行きしづが誇り

丹田に自づと冬座敷

きつちりと閉めてください冬座敷

一幅の書の語りくる冬座敷

冬座敷肩肘張つてする話

北風が風の口笛掬ひたる

静けさに耳そばだてる冬座敷

北風にに耳そばだてる冬座敷

中々に出番無さかに冬座敷

冬座敷古武士の孤高めく静寂

駅までは北風に真向ふは無く

冬座敷數くらりと揺らす今朝の地震

庭明り鳥も影絵に冬座敷

座布団の丸も四角も冬座敷

(廣太郎先生出句)

寒灯に映ゆほととぎす創刊号

父の座の遺されしまる冬座敷

寒風裡苦屋川水満々と

北風荒ぶ富嶽は地震に明け初むる

虚子の軸掛け冬座敷出来上る

暮早きことに顔ぶれ少なかり

北風もはんなりと吹く先斗町

北風の木端微塵に碎く愛

○テレビには綾子のかべー冬座敷

○冬座敷足裏に固き達かな

語らざるセビアの写真冬座敷

山越えの北風遊ぶ芦屋浜

北風と戦ふ杉の秀のありぬ

北風やネッカチーフで目だけ出し

詰輪祝ぎ館のいやさか冬日漫し

北風の鳴る闇の調べは海へ吐く

汀子選休載と紙に霜の朝

冬座敷文机一つ影一つ

北風やつんづん尖り出す水辺

閉めきつて秘密の話冬座敷

日溜りに包まれて居る冬座敷

安眠を崩すかに鳴る夜半の北風

旧家守の不便な暮し冬座敷

北風のまにまに星の瞬きぬ

北風や海神の笛鳴りひびく

ひとりみの黙の張りで冬座敷

床の間に香の広がる冬座敷

玻璃越しの日差し長々冬座敷

天帝の大袋より出たる北風

北風の攢つて行きしづが誇り

丹田に自づと冬座敷

きつちりと閉めてください冬座敷

一幅の書の語りくる冬座敷

冬座敷肩肘張つてする話

北風が風の口笛掬ひたる

静けさに耳そばだてる冬座敷

北風にに耳そばだてる冬座敷

中々に出番無さかに冬座敷

冬座敷古武士の孤高めく静寂

駅までは北風に真向ふは無く

冬座敷數くらりと揺らす今朝の地震

庭明り鳥も影絵に冬座敷

座布団の丸も四角も冬座敷

(廣太郎先生出句)

寒灯に映ゆほととぎす創刊号

父の座の遺されしまる冬座敷

寒風裡苦屋川水満々と

北風荒ぶ富嶽は地震に明け初むる

虚子の軸掛け冬座敷出来上る

暮早きことに顔ぶれ少なかり

北風もはんなりと吹く先斗町

北風の木端微塵に碎く愛

○テレビには綾子のかべー冬座敷

○冬座敷足裏に固き達かな

語らざるセビアの写真冬座敷

山越えの北風遊ぶ芦屋浜

北風と戦ふ杉の秀のありぬ

北風やネッカチーフで目だけ出し

詰輪祝ぎ館のいやさか冬日漫し

北風の鳴る闇の調べは海へ吐く

汀子選休載と紙に霜の朝

冬座敷文机一つ影一つ

北風やつんづん尖り出す水辺

閉めきつて秘密の話冬座敷

日溜りに包まれて居る冬座敷

安眠を崩すかに鳴る夜半の北風

旧家守の不便な暮し冬座敷

北風のまにまに星の瞬きぬ

北風や海神の笛鳴りひびく

ひとりみの黙の張りで冬座敷

床の間に香の広がる冬座敷

玻璃越しの日差し長々冬座敷

天帝の大袋より出たる北風

北風の攢つて行きしづが誇り

丹田に自づと冬座敷

きつちりと閉めてください冬座敷

一幅の書の語りくる冬座敷

冬座敷肩肘張つてする話

北風が風の口笛掬ひたる

静けさに耳そばだてる冬座敷

北風にに耳そばだてる冬座敷

中々に出番無さかに冬座敷

冬座敷古武士の孤高めく静寂

駅までは北風に真向ふは無く

冬座敷數くらりと揺らす今朝の地震

庭明り鳥も影絵に冬座敷

座布団の丸も四角も冬座敷

(廣太郎先生出句)

寒灯に映ゆほととぎす創刊号

父の座の遺されしまる冬座敷

寒風裡苦屋川水満々と

北風荒ぶ富嶽は地震に明け初むる

虚子の軸掛け冬座敷出来上る

暮早きことに顔ぶれ少なかり

北風もはんなりと吹く先斗町

北風の木端微塵に碎く愛

○テレビには綾子のかべー冬座敷

○冬座敷足裏に固き達かな

語らざるセビアの写真冬座敷

山越えの北風遊ぶ芦屋浜

北風と戦ふ杉の秀のありぬ

北風やネッカチーフで目だけ出し

詰輪祝ぎ館のいやさか冬日漫し

北風の鳴る闇の調べは海へ吐く

汀子選休載と紙に霜の朝

冬座敷文机一つ影一つ

北風やつんづん尖り出す水辺

閉めきつて秘密の話冬座敷

日溜りに包まれて居る冬座敷

安眠を崩すかに鳴る夜半の北風

旧家守の不便な暮し冬座敷

北風のまにまに星の瞬きぬ

北風や海神の笛鳴りひびく

ひとりみの黙の張りで冬座敷

床の間に香の広がる冬座敷

玻璃越しの日差し長々冬座敷

天帝の大袋より出たる北風

北風の攢つて行きしづが誇り

丹田に自づと冬座敷

きつちりと閉めてください冬座敷

一幅の書の語りくる冬座敷

冬座敷肩肘張つてする話

北風が風の口笛掬ひたる

静けさに耳そばだてる冬座敷

北風にに耳そばだてる冬座敷

中々に出番無さかに冬座敷

冬座敷古武士の孤高めく静寂

駅までは北風に真向ふは無く

冬座敷數くらりと揺らす今朝の地震

庭明り鳥も影絵に冬座敷

座布団の丸も四角も冬座敷

(廣太郎先生出句)

寒灯に映ゆほととぎす創刊号

父の座の遺されしまる冬座敷

寒風裡苦屋川水満々と

北風荒ぶ富嶽は地震に明け初むる

虚子の軸掛け冬座敷出来上る

暮早きことに顔ぶれ少なかり

北風もはんなりと吹く先斗町

北風の木端微塵に碎く愛

○テレビには綾子のかべー冬座敷

○冬座敷足裏に固き達かな

語らざるセビアの写真冬座敷

山越えの北風遊ぶ芦屋浜

北風と戦ふ杉の秀のありぬ

北風やネッカチーフで目だけ出し

詰輪祝ぎ館のいやさか冬日漫し

北風の鳴る闇の調べは海へ吐く

汀子選休載と紙に霜の朝

冬座敷文机一つ影一つ

北風やつんづん尖り出す水辺

閉めきつて秘密の話冬座敷

日溜りに包まれて居る冬座敷

安眠を崩すかに鳴る夜半の北風

旧家守の不便な暮し冬座敷

北風のまにまに星の瞬きぬ

北風や海神の笛鳴りひびく

ひとりみの黙の張りで冬座敷

床の間に香の広がる冬座敷

玻璃越しの日差し長々冬座敷

天帝の大袋より出たる北風

北風の攢つて行きしづが誇り

丹田に自づと冬座敷

きつちりと閉めてください冬座敷

一幅の書の語りくる冬座敷</

○春立つと言へど氣掛かりなる一事
立春の空へ放ちしティーショット
拭き込みし玻璃の光に春の立つ
○暁はひの黙や公魚釣りの余興
モーニングティー！立春の香り立つ
釣る魚一匹跳ねてゐしが止む
立春や支援する人される人
公魚や向ふ句会は事故連延
公魚の姿のよさも天ぶらに
○立春の大き日の中とんび舞ふ
立春や春の立つ
公魚や糸に銀鱗絡みたる
公魚や鰯られぬく鎖の水
転任地公魚釣りに慣れもして
日に風に大地の鼓動春立ちぬ
生き生きと集ふ面頃春立つ日
釣り風に公魚跳りきらめける
立春立ちぬホトトギス派にある未来
立春の湖平らかに日をのせて
○立春や鉄路の軋み騒やかに
立春の恒例行事豆播除
立春と言へどモノクロ街の景
○立春立つや海を見たくて降りる駅
公魚を釣る穴ひとり一つづ
床柱拭く立春の紺布巾
立春の予定の増えゆく暦
立春立ちて予定の増えゆく暦
立春や庭に散らばる昨夜の豆
立春や日差に気配感じたる
春立つや心の軽くなる旅路
立春や運河に日が翳る
○公魚のかすかに糸を引きにけり
立春や山嶺の梢確と見ゆ
○立春立つやバターの匂ひパン厚く
釣り足らず公魚買うて帰りけり
公魚を釣るさざ波きらめきも
立春やベルのやうな雲かへ
○良白く公魚釣りのヤッケ赤
立春立つや花舎の店先彩りぬ
夕影ののりで公魚釣りを終ふ
立春やベールのやうな雲かへ
公魚の今が盛りと諭証便り
カナリアの水は光に春立ちぬ
立春やさう聞くだけで嬉しくて
立春立つや止めねばならぬ負の連鎖
○立春や鬼の足音遠ざかる
立春の日差しは春の四隅まで
公魚や風まだ固き東条湖
公魚の水の落ちゆく大潮かな
風に目に目覚むる五感立春立ちぬ
立春やスカラ一軒く縛結び
○立春立ちぬ
（廣太郎先生出句）

令和三年四月 稲畑汀子選
花に伏す友への折り届けよと
花に発ち花に着く駆よへる美しさ
さくらにも余生を咲かせる美しさ
春惜む庭の水音の細きにも
虚子館へ散る花を浴び惜みつつ
咲き満ち風に黙解く桜かな
散る花の止つてをりぬ花の下
鐘の音は福音白き日曜日
まだ都会にもゐる野鳥古巣かな
一人旅虚子の館に春疾風
新茶汲む二ひの雪の音したかく
しろがねの山女ぐがねの水飛沫
若葉風文学館に調べもの
虚子のこと問ふインタビュ一館涼し
卯浪寄す太極の音の響く如
木洩日もそつと包んで袋掛
母の日や路傍に摘みし花一輪
集まりし句会や五月間闇灯し

次回以降の六甲会のご案内

日 時 令和4年6月3日（金）	兼 題 蛇・夏帽子
今後の予定 9月2日（金）、12月2日（金）	虚子記念文学館投句特選句
令和三年二月 稲畑汀子 選	花ミモザ未来信じる看取妻
春風や虚子館はドア開け放ち	稻畑 汀子・稻畑廣太郎 選
懷に抱く分校春の山	新潟 森喜喜恵子
ふくよかな虚子のふところ紅椿	安原 華
朝桜ひとゆれもなく散りゆける	兵庫 三村 純也
下萌や舗道の間に隙間なく	兵庫 小杉伸
歲月や記念樹春の空を突く	神奈川 進藤 智子
3月や焦土と津波経験す	兵庫 小柴 敦之
海を向く干物のまなこ涅槃西風	兵庫 高市 敦之
大坂 西尾 敦之	大阪 武田 昭子
兵庫 武田 奈々香	青少年

秋葉子の龍をほみ出す色と質 香まとふ葉書の届く文月かな	オリンピック大歓声の蟬と母 まんまるを手に取つて鳴る青柑桔
令和三年九月 稲畑汀子	選
俳磯の詩の余韻や月の庭 爽やかな館俳磯に閉まれて どの花もみんな小さく大花野	新潟 安原 葦 兵庫 池田雅かず 石川 村上 秀吾
虚子館の俳磯磨く秋の雨 心音も庭に響けさき水の声 心耳も庭で聞く虚子の声秋の声	兵庫 武田正子 兵庫 伊東弘太郎 兵庫 金田八江子
不規則を美しく装ふ秋の浪 唐突に今朝唐突に彼岸花 真筆を抒し身近に子規忌かな	西村やすし 京都 安原 葦 兵庫 池田雅かず 石川 村上 秀吾
秋蝶の翅に朝の空の色 ビルといふ置物並ぶ神の旅 新米やとぎつ五指の弾みたる	兵庫 武田正子 兵庫 伊東弘太郎 兵庫 金田八江子
令和三年十月 稲畑汀子	選
新酒てあだなれだけのことなれど 秋蝶の翅に朝の空の色 ビルといふ置物並ぶ神の旅 新米やとぎつ五指の弾みたる	小杉伸一郎 兵庫 山田 佳雄 兵庫 進藤 城至 福岡 笠原 青少年
選	兵庫 武田正子 兵庫 伊東弘太郎 兵庫 金田八江子 二瓶美奈子 武田 久々タカヒコ

令和四年一月 稲畑汀子・稻畑廣太郎 共
鎮魂のトランペットや星浮ゆる
ひとひらをたたみ餅となる
海風の上あげてゐる水仙花
踏み入れば光景みなぎる館の庭
病窓に快癒の力四温晴
うつくしき言葉の葉の国かるた取る
希望また早梅の香に気づくより
人動く度胸マシヒラドニコイナキタ
オイオチバタマシヒラドニコイナキタ
クイーンの扱い一閃かるた会

令和四年二月 稲畑廣太郎 選

俳碑の日の斑こぼれて名草の芽
二ヶ月の城にアイロンかけてをり
虚子館の春の雪なら濡れもして
薄水に風滑りゆく艶かな多
立春や胸に騒めくもの多
快晴や虚子生誕を祝ぐ二月
梅が香や静心なる詩心
虚子像のまるやかな春立ちぬ
春浅し六戸を赤はげ顔
返る神戸を赤い靴で行く

兵庫 池田雅かず
中村 恵美
桂川 由美
平田 ささ
高野 剛
神奈川 進藤
玉手のり子
兵庫 岩水ひと
神奈川 平野
孤舟
武田 奈久
兵庫 武田
兵庫 高野
進藤 剛
吉村 玲子
玉手のり子
兵庫 徳永
前田 容谷
新潟 安原
岩水ひと
兵庫 藤井 啓子
石川 辰巳
兵庫 江川
由美

(青少年)

桔梗や一村いまも光秀派 添水の音庭の静寂のありてこそ 柿熟るる今日の夕日の色をして 虚子館に集ふあはせモホ句の秋 虚子館の地下の集ひも秋日和 過ぎてゆく群れの高さや囁鳴く	令和三年十一月 稲畑汀子選	虚子館へ道のり轢ろし小春かな 白無垢の染まりうさうなる紅葉晴 切干の大鉢どんとたき上がる 赤々と鶏頭くらき花壇かな 風韻の桜の根に押されひらきけり 茶の花の蕊に押されひらきけり 城濠は水の回廊紅葉燃ゆ 一年の思ひ秘めたる冬紅葉 敏の手の爪縫る数珠や華恩講 業平橋行き交ふ人の息白し	大阪 奈良 大阪 大阪 大阪 奈良 好川 忠雄 杉千恵子 多羅 大阪 杉千恵子 内田 泰生 兵庫 兵庫 武田 奈良
令和三年十二月 稲畑汀子・稻畑廣太郎	兵庫 阿曾 宏之 兵庫 阿曾 宏之	館の内外に虚子より冬ぬくし 幽玄の触極めたる冬の月 交差点それぞれにある師走かな 冬耕の大地の言葉聞かながら いたはりの心庭にも霜匂 七三小さく紅を引きにけり 水鳥の声よくて明けにくる 寝顔など氣にしてをれぬ日短 うすものいのちのうたや冬木の芽	大阪 奈良 大阪 大阪 大阪 奈良 好川 忠雄 杉千恵子 多羅 大阪 杉千恵子 内田 泰生 兵庫 兵庫 武田 奈良
(青少年)	(青少年)	(青少年)	(青少年)

次回以降の六甲会のご案内

日時 令和4年6月3日（金）
兼題 蛇・夏帽子

虚子記念文学館に咲く

花の歳時記

木の芽・芽立ち

俳磚が彩る虚子記念文学館中庭の樹上には、根元の太さが3mを超えるクスノキがある。クスノキは「兵庫県の木」である。

クスノキはクスノキ科の常緑広葉樹で、大高木。大きなものは高さ30m以上樹齢約800年という巨樹になる個体もある。葉や木の各部には甘い芳香があり、樟脑の材料になる。葉の寿命は一年で、春、写真のような新しい葉が出るときに古い葉が一斉に落葉する。

芽ぐむなる大樹の幹に耳を寄せ
虚子（大正十五年）



令和4年3月撮影

第十七回国際俳句シンポジウム 第十五回虚子生誕記念俳句祭開催

令和四年二月十九日（土）、公益社団法人日本伝統俳句協会主催の第十七回国際俳句シンポジウムが、虚子記念文学館多目的ホールにて開催されました。

新型コロナウィルス流行の影響を鑑み、初の試みとして、オンラインを利用したシンポジウムを実施しました。各パネリストはオンラインでの参加、会場からは

コードイネーターがオンラインで参加し、聴衆は会場スクリーンにて、討論を聴講し、質疑応答等に参加しました。



理事会・評議員会報告

公益財団法人虚子記念文学館理事会、評議員会が開催され、次のことが審議、決定されました。

（令和三年五月）

・令和二年度決算
・役員の改選と定数変更
・令和二年度事業報告
・令和二年度予算
・令和四年度事業計画
・令和四年度予算
・令和二年度事業報告
・役員の改選と定数変更
（令和四年一月）



俳傳のご案内

虚子記念文学館には、虚子をはじめ多くの方々の俳傳が建立されています。

令和四年四月に新たな掲載区画を中心設けられました。最後の掲載区画となります。思い出の一言を虚子記念文学館に遺してみませんか。



◆令和4(2022)年度 虚子記念文学館休館日カレンダー◆											
4月				5月				6月			
日	月	火	水	木	金	土		日	月	火	水
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
24	25	26	27	28	29	30	29	30	31		
7月				8月				9月			
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
24	25	26	27	28	29	30	29	30	31		
10月				11月				12月			
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
23	24	25	26	27	28	29	27	28	29	30	31
令和5年1月				2月				3月			
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16
22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23
29	30	31		26	27	28	26	27	28	29	30

休館日（印）毎週月曜日、祝日の翌平日、夏期、年末年始他
やむを得ず臨時閉館させていただきます。
展示替期間中は、一部ご覧いただけない箇所もございます。

虚子記念文学館館報 第四十一号
編集・発行 虚子記念文学館
〒六五九一〇〇七四
兵庫県芦屋市平田町八一一二
電話（0797）二一一一〇三六
FAX（0797）三一一一〇六
HPアドレス：<http://www.kyoshi.or.jp/>
e-mailアドレス：kyoshi@asemailine.jp